

文化的景観は 何のこと？ 文化財と世界遺産石見銀山遺跡

James Russell, SOAS

▶島根県大田市大森町の紹介:位置、自然が引き継ぐ山村、空き家、過疎地帯、遠隔、高齢化しかし、500年前は、何万人の住民で繁栄する銀鉱山の中心部であった所です。今、約400人住む観光地になってしまいました。

▶ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)によりますと、『遺跡景観』は過去の人間活動を示す証拠があって、有機的に進化された景観です。石見銀山の場合は、その跡は山林の下に殆ど見えない銀鉱山の間歩とか、製錬所とか、戦国時代の古城とか、山道とか、放棄された寺社とか、墓地とか含めます。考古学的探査はまだ始まったばかりで、竹と松林の下に何があると誰も知りません。『遺跡景観』はユネスコが認める文化的景観の一種です。その景観は継続的に使用されている場所ではなくて、自然環境と過去の人間の相互作用の証拠が重要と考えられる状況を反映している定義です。景観の整合性に脅威をもたらすのであれば、環境と地元の人々によって現在のものの相互作用にのみ意味があると考えられている。

▶正式には、ユネスコの文化的景観が世界遺産に指定された文化財に指定されている。これは、ユネスコ憲章の下での法的分類であり、文化庁を通じて日本に支持した。日本で14件の世界遺産があって、そのうちの2件は、文化的景観です(石見銀山、高野山関連の霊場と参詣道)。政府とか国際機関は集団への主張された値のための文化財として特別な処理のための対象を選択します。このように指定する財産が構成されている方法に影響を与える。日本では、本当に重要な対象が指定されていません(桂離宮、伊勢神宮、皇居)。経済的搾取を犠牲にしている対象(観光)だけが政権の目標となります。真に社会で珍重さを理解するためには、文化的財産として含まれていないかを調べる必要があります。

▶財産の文化人類学的概念は、対象（有形無形）、それに関連付けられている人々の間の関係として定義されています。資本主義の法理論の財産の最も一般的な概念は、所有者が所有する対象の搾取のための完全な使用权を持っているということです。しかし、この枠組みは、財産の関係を定義する唯一可能な方法ではありません。さまざまな社会の他の多くの種類があります。贈り物交換では、例えば、所有権の考え方は意味をなさない。ある社会では、関係が保全の主なものです。多くの場合、対象は、集団内で循環的な生活を持っている世代を通過するには値を保持します。遺産は、まさにその意味です。多くの対象が20世紀まで、英国の不動のように、分割できないと考えられるかもしれません。財産の商品主導の経済制度は、一つだけの可能性で、過去200年間の西洋では支配的になった。

▶文化財の指定は、経済的所有権からいくつかの使用権を分離することを企てています。いくつかの公共の権利は特別な対象の場合、私立よりも重要なものとみなされます。これは、財産を保存するユネスコの請求に関連し『顕著な普遍的価値』に違いない。しかし、当該財産は、物理的な物ではありません。**財産というのは権利と責任の組合せで、人々と対象間の関係を構成する概念です。**指定された文化的景観の使用の痕跡と自然環境は、通常の場合に、財産して見られているが、そうではありません。環境と関連痕跡は当該対象だけを構成します。それは彼らの自然環境と人々の過去の相互作用と**同時に**、今、地元住民と観光客が何の様な形で自然環境と相互作用の可能を参照しているために、遺跡景観は興味深いものです。

▶大森の場合、過疎化、空、草ぼうぼうと言っても、景観に関連する精神的な連続性の強い感覚がある。環境との祖先の実際の相互作用を反映するため、過去の活動の痕跡が非常に高く、地元住民によって評価されている。しかし、正式の『文化的景観』として、文化財の指定は、小奇麗と観光客に提供することができる標準化された官僚の美学理論のような値を定義する傾向がある。ディズニー化とキッチュ(如何物)の意味です。ブルノー・タウトの日本建築史系譜の下、キッチュ側は商業的利用のための標準的な計画などの文化財です。場所の特殊性を破壊しながら、これらの文化財は、地位、および信頼性のオーラを授けるものとブランド大森の対象の複製をお勧めします。

▶大森からの例は、昔の活動の兆候が段々薄れると、村は文化的景観の一部として再定義されています。古い材料の再生利用、大森小学校と雑巾掛け、分離の結果としての侘び寂び。